

## 私の一冊

看護学科 高林ふみ代 先生

レイチェル・カーソン著 『沈黙の春』

小鹿図書館 : 519.79/C 22 (新潮文庫)

巷では、昭和がブームだそうである。「always 三丁目の夕日」なんてのもあったし、「花田少年史」なんてのもあった。「地下鉄に乗って」は上映中(10月末現在)だし、かつて田辺聖子作品を愛読した私はNHK朝の連ドラ「芋たこなんきん」に完全にはまっている。平成の世ににわか湧き起こった「昭和ふりかえり現象」は、わき目もふらずに働いてきた団塊の世代が退職を迎え、そろって自分の原点をふりかえりだしたからなのか…。

閑話休題、1964年。昭和39年の日本は東京オリンピック開催にわき、高度経済成長まっただなか。高速道路、新幹線、新興住宅地など経済成長を象徴するものたちが平地の少ない日本で山を切り崩し海岸を埋め立ててつくられていった。「四日市ぜんそく」「水俣病」「イタイイタイ病」など「公害病」という経済成長の負の側面を認識しつつも、豊かさを求め突き進んでいた。そんな時代に「SILENT SPRING」の邦訳は出版された。アメリカでは2年前の1962年に出版され社会に衝撃を与えたが、日本では専門家にこそ注目されたが一般社会ではそれほどの反応はなかったらしく、当然のことながら当時小学生だった私もこの本の出現を知る由もなかった。

「沈黙の春」の著者レイチェル・カーソン女史は1907年ペンシルバニア州生まれ、大学の専攻は動物学。女史は化学物質による環境汚染の深刻さを真正面から捉えた本書を55歳のとき世に問うた。

私がこの本と出会ったのは邦訳出版から10年以上あと、大学生になってからである。環境汚染告発の書であることは知っていて手にしたのだが、不謹慎にも私はそのタイトル「SILENT SPRING, 沈黙の春」という言葉のロマンチックなひびきにまず感心した。著者をまじめ一辺倒の科学者であろうと想像していた私は、やさしさの感じられる文章に新鮮な驚きを感じたのを記憶している。しかし、美しい表題ややさしみのある文章とは裏腹に、示された内容は深刻であった。

その存在が人類の利害と相反する昆虫や微生物に決定的な悪影響を及ぼす化学物質は、それらのもたらす厄災から私たちを守る魔法の弾丸として人類史上に誕生した。だが同時に、化学物質は地球上の生命体として類似の代謝システムをもつ私たちの細胞にも少なからず悪

影響をもたらす諸刃の剣だったのである。害虫駆除のために大量に空中散布された農薬が、食物連鎖の上位の動物に受け渡され、散布当初の意図とは異なる深刻な状況を招いてしまう。害虫はたしかに死んだろう。でも害虫と名づけられなかった無数の昆虫も死んだ。さらに農薬を浴びた昆虫を餌にした小鳥、その小鳥を捕食した猛禽までも数を減らした。また、農薬は雨水に運ばれ河川に溶けこみ小型生物を汚染し、それを捕食する大型の生物に浸透していった。こうして小鳥のさえずりの聞こえない、魚鱗のきらめきの見られない「沈黙の春」が訪れたことを、本書は事例を述べ裏づけのデータを示しながら、読者の退路をふさぎ、自覚させていく。

本書が世に出てから 40 年以上が経過した。その間に私たちを取り巻く環境はどう変化したろうか、この本のメッセージに耳を傾けてきたろうか。答えは「イエス」でもあり「ノー」でもあろう。化学物質の毒性に関して社会の関心が高まり、安全基準が厳しくなったり農薬使用量を抑えた農業が模索されるようになった、「イエス」。化学物質に対する昆虫や微生物の耐性化が進み、私たちは常により手間のかからないかつ有効な化学物質を捜し求めている、行き過ぎた潔癖志向により過剰な防虫抗菌性化学物質が生活に入り込んでいる、「ノー」。

アダムとイブは「知恵」を手にした事で楽園での生活を失った。しかしそれ以来、人類は「知恵」を駆使して地球上を席卷してきた。それが自らの存在を危うくする「浅知恵」なのか、生態系内で共存をめざして努力する「叡智」なのか、レイチェル＝カーソンは、時を経て私たちに重い問いをなげかけ続けている。